

Title	静岡修善寺葦山方面旅行記
Sub Title	
Author	浅村, 一郎(Asamura, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.2 (1940. 9) ,p.160(362)- 163(365)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400900-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

静岡修善寺葦山方面旅行記

昭和十三年五月二十八日（土曜日）伊木先生の御指導の下に朝霧立ち込める東京驛を一行（占部、間崎、今宮、宮島の諸先生並びに學生十五名）は午前六時四十分發、姫路行列車で一路西下、静岡に向ふ。途中水口君を品川驛に淺野君を横濱驛に迎へる。氣遣はれた曇勝の空も、大船、藤澤、熱海を過ぎる内に青空を見せて來た。一行中に雨具を用意して脾肉の嘆を啣つもの、富士の靈峰を仰ぎて寫眞機を取り出すもの、雑談に花を咲かすもの、車中和氣靄々裡に静岡に到着したのは丁度十時四十九分、静岡驛で更に先着の田中先生を一行中に迎へ、直ちに静岡電氣會社バスに乘車、縣廳公會堂を左に見て、先づ國幣小社淺間神社に詣でる。

當社は神部、淺間、大歲御祖の三社が同格で一境に鎮座し、普通静岡淺間神社と總稱し、社は江戸時代末期の再建で樓門、廻廊、舞殿、拜殿及本殿より成つてゐるが、殊に拜殿は七間四面切妻造銅瓦葺、前面に千鳥破風を附し、中央に高樓を有した所謂淺間神社造りで、内外朱塗の大建築は背後に賤機山の老樹を控へて一大偉觀を呈してゐる。具原益軒の吾妻路の記に「當社は宮づくり美麗なる大社なり、日本にて神社の美麗なること日光を第一と

して淺間神社を第二とす云々」とあるも宜べなる哉である。參拜後、神官に案内せられて神寶を拜見する。今その主なものを擧ぐれば次の如くである。

- 一、正親町天皇宸筆龍虎大文字
- 一、後水尾天皇宸筆色紙
- 一、永祿三年三月三日今川家三日會裝束寄進朱印狀
- 一、元龜二年十一月廿五日武田家造營朱印狀
- 一、天正十四年九月十四日徳川家康造營勸進朱印狀
- 一、天正十八年八月廿二日豊臣秀吉社頭安堵狀
- 一、寛永三年山田長政奉納戰艦圖（模寫）
- 一、須田郷藏奉納大象圖

長崎燕木梅溪畫 清人、江藝閣書 蘭人、へんでれきとう
ふ (Hendrik Doeft) 讚

- 一、山田長政肖像（太田與兵衛寄進）
- 一、狩野守信筆歌仙圖（寛永十一年徳川家光奉納）
- 一、徳川家康、鎧着初ノ緋威腹巻
- 一、鐵製釣燈籠（永祿十一年武田信玄奉納）

正午近く、同社を辭去した一行は、再び自動車に乗り静岡高等學校前を北に經て、程近くの臨濟寺に至る。

當寺は元善徳院と稱し、享祿年間、國主今川氏親三男僧承等の爲に建立せる所であつたが、天文五年嫡子氏輝卒し本院境内に埋め、臨濟寺殿前駿河太守用山玄公大禪定門と法諡したので、大龍山臨濟寺と改稱した。開基は今川義元の叔父太原崇孚（雪齋、寶珠護國禪師）であるが、その師大休宗休（圓滿本光國師）を仰い

で開祖となし、自らは二世となつた。方丈の前廂に掲げられたる「勅東海最初禪林」の勅額は當時のものといふ。この後二度兵火に罹つたが、天正十年徳川家康の再建したのが今の方丈である。

家康は幼時、今川義元の人質となり、七歳より十四歳まで八年間この寺に預けられ、太原和尚の薫陶を受けたものと謂はれ、その「手習の間」と稱する一室が、今も書院内に昔ながらの姿を留め、その使用品も若干保存されてある。開山堂には正親町天皇の尊牌、護國道場には家康が陣中の守護神として常に携帯してゐたと云ふ摩利支天の尊像が安置されてある。一同は案内されて、大庫裡、護國道場、傳衣閣、茶席無想庵、開山堂等を巡り、それに陳列してある什寶物を拜觀する。その主なものは次の如くである。

一、後奈良天皇宸翰額同女房奉書

一、正親町天皇宸翰、同女房奉書、同四辻大納言御添狀

一、徳川家康朱印狀

一、由井正雪書狀

一、徳川慶喜書東照宮遺訓

一、當山開祖圓滿本光國師書、吳船の掛繪

一、日隱禪師粉引歌

最後に境内にある義元の墓に詣で、再び車上の人となつて、魚町の寶臺院に急ぐ。當寺は淨土宗京都智恩院の末寺で、もと金米山龍泉寺と稱し、永正三年僧祐崇抽木村（現今の豊田村）に建立したものであるが、徳川秀忠の生母、西郷局品子を葬つた爲めに、秀忠當寺を現地に移建して寶臺院と改稱したといふことである。

一同先づ大方丈に案内される。單層入母屋、中央奥の間には家

康の木像を安置し、御神殿と稱してゐる。その床柱は桑の木とかで一同の眼を惹いた。上段以下の間には探幽の筆といふ障壁畫がある、此の方丈の裏手に西郷局の靈廟がある。それは靈屋と石の寶塔とよりなつて、靈屋は方三間單層寶形造、本瓦葺、總漆塗で唐門透塀に圍まれ、その背後に石の寶塔がある。

當寺で見學した主な古文書類は

一、薄墨の繪旨（禮紙附）

一、女房奉書（禮紙附）

一、寛永五年五月九日宣命

一、正保四年三月十五日傳馬朱印狀

等であつて、古文書の形式紙質の参考になつたことは喜ばしい。不意の訪問にもかゝはらず、好意を以て拜觀の便宜を與へて下さつた若き住職に感謝して暇を告げ、更にバスを走らしむること約十料、午後二時久能山の麓に着き石橋旅館で遅目の中食を攝る。

當山の古き傳説は省略する。永祿年間甲斐の武田信玄が當國を領するに及び、その天險を相て城砦を構えて久能城と稱し、徳川氏の世に至り、榊原大内記當山の守護であつたが、元和二年四月十七日家康が駿府城に薨じた時、當地に埋葬し、城郭を廢し社殿の造營に着手し、頼宣を總帥に中井大利を棟梁として翌年十二月落成した。然るにその後間もなく遺骸は僧正天海によつて下野の日光に移されたのであるが、堂塔は依然として存し、徳川家の二大廟となつて居り、今は別格官幣社久能山東照宮と稱してゐる。二時半旅館を出て、山麓より曲折せる石段を登ること千數百段、此間凡六町、願れば漫々たる駿河灣の展望が開け、遠く伊豆の連

山が煙つて見える。山門を經、雁木坂を登ると樓門があり、後水尾天皇の勅額「東照大權現」の五大字が掲げてある。唐門を經て境内に入る。拜殿は五間二面入母屋造、銅瓦葺三間の向拜を附け、朱塗の柱を立て、内部には極彩色牡丹の彫刻があり、欄間には天人が描かれ、華麗を極めたものである。本殿には徳川家康を祀り、その左右に豊臣秀吉及び織田信長が配祀してある。社殿の背後數十歩、石段を登りつめた所に俗に寶塔と云ふ石の墓塔があり、これを參拜した後、再び前の道を戻つて寶物館に入る。

家康以下歴代將軍の遺品、甲冑刀劔その他多數陳列してあるが中にも主なものは

- 一、元和三年十二月七日遷官使太政官符 一通
- 一、元和三年十二月七日奉幣使太政官符 //

一、徳川家康遺品鉛筆 一本

一、同枕時計(眞鍮製鐵器械、外覆黒革製、西曆一五八一年西班牙マドリットに於てハニス製造とあり) 一個

等であつた。

三時半再びバスに乗り、延喜式大己貴命、御穂津比火命を祀る御穂神社に參拜し、羽衣傳説に名高い三保松原に夢の國を想ひ、清水港を半周して東海道清水驛に至る。五時八分同驛發、三島驛で駿豆鐵道に乘換へ七時七分修善寺驛着、直ちに「新井屋」に至つて投宿した。

五月二十九日(日曜日)

午前十時出發、先づ北條政子が源頼家の爲め宋版一切經を藏めて建立した經堂指月殿の左側にある頼家の墓、次いで範頼の墓に

詣で悲劇の主人公等の冥福を祈り、再び桂川の河邊に戻り、大同年間弘法大師の草創と傳へる獨鈷の湯を右に見て修禪寺の門を叩く。當寺で見學した古文書類は左の如くである。

- 一、放光般若波羅密陀經 北條政子筆
(二十三卷の奥書に「爲征夷大將軍左金吾督源頼家菩提尼置く」とある)

一、宋版妙法蓮華經 七卷

一、阿彌陀經斷片(別當公曉の血書)

一、癸亥十二月二十八日南條民部丞奉北條氏虎印判狀

一、天正十三年乙酉九月十八日南條民部丞奉印判狀

一、元龜三年壬申正月十六日南條因幡守奉印判狀

一、永祿元年六月朔日北條氏康寄進狀

正午すぎ當寺を辭去し、菊屋別館で中食を攝り、修善寺驛を一時五十五分に發ち、長岡驛に二時二十五分に着き、直ちに東方にある反射爐址を見學する。これは江川太郎左衛門英龍の建議で安政二年造營されたもので、爾後明治維新まで大小砲數百門を鑄造した所である。高さ一六米の煙突及長さ五米六、幅五米の爐址が残つてゐるが、上部の所少し昭和五年十一月二十六日この地方を襲つた北伊豆地震の爲破壊されてゐる。これに使用されてゐる耐火煉瓦は千七百度の高熱に堪へるもので、天城山麓梨木その他の土を取り苦辛慘憺の後、製造したものであると老番人は語つた。

ここより徒歩で約半里、午後四時江川邸に至る。執事の案内で當家の由來を聽く。この建物は八百年の星霜を經た鎌倉時代の建物で、單層入母屋造茅葺、當時は未だ鉤を使用してゐなかつた爲

め全ての材は手斧を使用したものであると云はれ、又生木の柱といふものが立つてをり古色蒼然たるものである。元來江川家は大和源氏の裔で、祖先宇野親信の時大和より十三人の郎黨を引具して移りてこの地を領し、源頼朝に應じて戦功あり江川庄一圓を興へられた。後第二十八世英長に至り徳川家康に用ゐられ、伊豆の代官となり、爾後子孫これを世襲したのであつたが、幕末の偉才垣庵江川太郎左衛門英龍は實にその第三十六世に當ると語られた。

次いで別室に陳列してある家寶を拜見する。それは主に垣庵に關係のあるもので、銃陳調練之記、御塾簿日記、大小砲操練出席姓名帳等あり、又韭山反射爐製の彈丸數個あつたが、殊に我々の眼を惹いたものは、水戸烈公、鍋島閑叟、藤田東湖、高島秋帆、阿部勢州、佐久間象山、渡邊崋山等の書翰類で烈公、象山の書中には中濱萬次郎の名も見えてゐる。何れも幕末に於ける垣庵の活躍を窺ふことが出来る。床間には高島秋帆の掛軸があり、欄間には垣庵座右の銘「忍」の自筆の額面が掲げてある。

一同江川家の手厚い歓迎に感謝しつつ、一路韭山驛に急ぎ、午後六時同驛で一先づ解散することにした。

かくして二日間に亙る見學旅行は無事に終了した。此度の旅行も例によつて忙しい見學を續けたが、幸にも天候に恵まれて愉快に完了出来たことは誠に喜ばしい。終りに本旅行に於て各方面で與へられた御好意に對し、厚く感謝の意を表する次第である。(淺村一郎記)

四國方面旅行記

昭和十三年十月五日午後九時東京驛發四國方面の史學旅行の途に就く。一行は指導教授伊木壽一先生と共に先輩齋藤成氏、及び學生清水秀雄、若櫻木叡、川村善三郎、山口文夫、淺村一郎、永見良、岡田平太郎、水町龍雄の都合十名。

東京驛頭に松本芳夫先生を始め、鈴木泰平、渡邊基、小川柳一の諸君が吾々を見送つて下さる。一同寢臺車の中央を占め、雜誌に耽つたが、十二時過ぎ、明日よりの見學に備へて床に入る。

十月六日午前七時七分京都着、川村君昨夜來の發熱の爲、四國行を中止して下車、これで行は伊木先生以下九名となる。京都に到るまで曇り勝ちの空模様で、その前途を危ぶまれたが、京都驛を出て西下するに従つて青空が擴がり、旅行日和となつて來た。大阪驛を出て二十數分、去る七月、六甲山麓を襲つた大出水の慘狀が次々に車窓に寫し出されて行く。それは吾々が曾つて想像した以上に慘憺たる光景で、文化が自然の偉力に、完全に敗退した姿であつた。午前十時五十六分、岡山驛にて宇野線に乗換へ、同十二時二十分、宇野棧橋に着く。直ちに連絡船南海丸に乗船し、瀬戸内海を横斷して四國高松に向ふ。船は滑る様に波を蹴つて進み、空は愈々晴れ渡り、内海の潮風が船中を流れる。陸と水との調和の美は、吾々に海國的興奮と歡喜とを與へて呉れる。一行はこの美しき眺めを楽しみつつ中食を攝る。左手に屋島の高臺がぬくと見えて來る。航行一時間で高松棧橋に着く。棧橋より程遠